会員だより

私とインドネシア

医療法人友愛病院　林　隆文

学究時代，敬愛する恩師から「熱帯医学に関心を持て」と言われた言葉が忘れられず，拾数年前機会があって，ジャカルタ空港に降り立った時，熱帯特有のさんさんたる陽光と，原色あふれる花々に接し，雪深い北陸に育った私としては，まさに驚異の一言であった。この瞬間から，私とインドネシアの数々のかかわり合が始ったと言ってもよい。

爾来今日に至るまで，私とインドネシアの関係は私を中心に創設もしくは継承した(1)友愛病院会インドネシア医療協力部，(2)日本インドネシア経済協力事業協会，(3)富山インドネシア友好協会の各組織を通じて，インドネシア医師団の日本引受け，インドネシア青年研修生の日本受託，インドネシア，日本の民間交流の三点に絞られる。以下，各組織の概況を示す。

(1)　友愛病院会インドネシア医療協力部
（1973年8月創立，理事長）

日本とインドネシアとの医科大学教育関係者の学術交流，ヤルシー医科大学に対する援助協力（医療X線機材，文献），国際医療会議出席のインドネシア医師，医学生への資金援助及び，インドネシア医師団の富山医科薬科大学，金沢大学医学部，金沢医科大学等，20数名の長期留学を保証及び資金援助

(2)　日本インドネシア経済協力事業協会
（1979年4月継承同協会の創立者であった同郷の稲波弘次氏が老齢を理由に，継承を依頼され，理事長に就任）

特に清潔な飲料水確保のため井戸水掘削技術をインドネシア青年に研修さすべく，友愛病院系列のアルプス技研に，年間常時10数名の研修生を受託せしめ，イ国の農業及び生活の為有為なる人材養成を手がけると共に，協会加盟各社に数名づつのイ青年研修生の受託を依頼している。

殊に，それらの受託期間中，日本語の修得を義務づけて，日本の良き生活習慣を習得させ，イ国と日本の未来のかけ橋の礎材を育てている。

(3)　富山インドネシア友好協会
（1984年8月創立，現在会長）

同協会は現在日イ両国の友好親善を具体的に進めることを目的に，イ国スラベシ島の平和財団（ハイルデン理事長）と提携して，現地に「平和村」の建設を強力に推進している。

スラベシ島は，日本の真南，赤道直下にあり，面積は日本の本州の約3分の2，人口1,200万の天然資源豊かな，いわば地上最後の楽園である。

同島の首都であるウジュン・パンダン市内と，同市から約70キロ離れた避暑地マリノ村の2カ所に，実験農場を中心とした「平和村」の建設に当っている。

ウジュン・パンダン市内の「平和村」には，日本語，花道，茶道等の教室を設けて，日イの文化交流を図り，マリノ村には農業を主体に，各種技術交流を目的

とする研修所を設けている。

特筆すべきは，この「平和村」に参加する日本人の主体を，高齢者の定年退職者に求めたことで，すでに全国からその希望者が，熱意あふれる反響を協会本部送って来ている。

この「平和村」の推進の為，私は，本年夏までにこれら希望者の第一団と共に訪イしたいと願っている。